

＜研究ノート＞

生活意識としての「学問」観の近代化過程について

－明治前期文学作品記述内容の一部を素材に－

松 野 憲 二

学問・実学・学者・近代化について

こゝで「学問」は、旧時代的な意味である。内容には二つある。①は、生活自立への普遍的な学習、の意味であり、普遍つまり誰でもものものだから、実学すなわち実生活に役立つ学習であるよりほかに、意味はない。違いは、内的か外的かにある。②は、価値的人間性であり、人間としての主体性の拠りどころである、自律的自己決定能力実現のための学習、つまり、内的実学のことである。両方の意味を持っているときに、「学問」とする。内的でなければ、実学は実生活の拠りどころになる外的知識を求める。

①普遍的学習：福沢諭吉『学問のすゝめ 初編』（明治5.2.刊）標題中の学問を例に挙げれば、ことは簡明である。初編における学問の意味は、疑いもなく、誰でも生活自立への経験獲得行為すなわち実学としての学習のことである。標題は、新時代の文明開化的な学問・実学を勧奨している。

敷衍すれば、「……専ら勤むべきは人間普通日用に近き実学なり。譬^{たとへ}えば、いろは四十七文字を習い、……物事の理を知らんとするには字を学ばざるべからず。これ即ち学問の急務なる訳なり。¹⁾」という訳である。したがって、上記①の意味にはなるが、②の意味は持たない。知識を世界に求める、外的実学である。

『学問のすゝめ 初編』と内容趣旨の酷似が言われる「学制布告文」（明治5.8.）が、新学校法令「学制」の意義を説いて就学を勧奨するのに、教育の語を一つも用いずに学問のキーワードで取り仕切っていることは、周知の事実。福沢と「布告文」の作成者は、当時人々のあいだに一般化していた、生活意識である「学問」観を利用しこれに訴え掛けようとしたところがある、という推測に無理はなかろう。古い革袋に新しい酒を入れた方が人口に膾炙しやすい、という訳である。

誰でもが分かっている、不可避な生活課題（天道：自然法）である、読み書きから始まる生活自立への経験獲得行為の必然感覚に、新しい中身を提示して人々の関心を引いたものと言えよう。『学問のすゝめ』がベストセラーであったことは周知の通り。

文明開化の当時、維新の主義は主義として、旧時代的生活意識が新時代にずれ込んでいたのは、生活者の感覚からすれば当然であろう。旧時代と新時代の生活者が物理的に別人である訳はない。

近現代の学問には、二つの意味がある。(a)は上記①つまり誰でも、自己保存・実現への生活行為としての学習であり、外的実学。(b)は専門家の学問・職業としての学問。

(a)について。学問＝生活自立への学習・外的実学観、の現代的な例は多いだろうが、

こゝに、夜間中学校を唯一の母校とする方の著書『学校が翼をくれた—55歳で夜間中学に入り、文字を獲得して書いた自分史—²⁾』(昭和58. 一光社)がある。同書中には、「ぼくのように……学問にたいして不幸だった者、……」というところがある。著者の生活確立への文字獲得行為のことであるから、普遍的学習であつて外的実学。もちろん、専門的な学問への言及箇所もある。

(b)の意味が旧時代、生活のなかに機能していなかった、などということはない。生活意識としての学問観の実際は、過去も現在も複合態である。旧時代は「学問」観が、生活意識的には多数派。近現代はその逆、つまり、人々は学問に多くの場合、専門的営為を意識する。実学でいえば、旧時代は、誰でも生活自立への内的学習を意識するのが多数派。近現代では、実用的な専門家の学問、ということになる。余計なことだか、往々にして行われる純粹形態＝最善という判断は、近現代分節化思考様式の欠点である場合が多いようだ。

②内的実学の説明は、内村鑑三『代表的日本人』に求めるのが最も分かりやすい。「私も、学校を知的修練の売り場とは決して考えなかった。修練を積み重ねれば生活費が稼げるようになるとの目的で、学校に行かされたのではなく、真の人間に成るためだった。私も、それを真の人、君子と称した。英語でいうジェントルマンに近い。³⁾」である。この時代でも、学校へ行って勉強するのはやはり生活自立のためであつた。ただし、この場合の生活自立とは、価値的人間性である生来可能態・理性能力の実現、つまり、自己の内的世界を原点として探究した存在の真理を、個体が主体的にすなわち自己責任において実践化できるように成ることであつた。そこに主体があつたのであつて、読書算など外的実学を習得しなかった訳ではない。

旧来実学は、ヒト科個体の本来性であり本能ともいふべき理性能力の、自己陶冶のための手段であつた。学習個体は、ヒトとして主体であるべく、自覚動機に基づいてなされる内的実学によって、いわば暗黙知である実践理性と形態知である理論理性が一体化する、生活者としての人格的自立を目指した。この実学者つまり生活実践への学習者は、完成態への無限の過程を志向して、限りなく充分に自律的自己決定態であろうとする。自覚動機は、世界内・状況内存在としてのヒト実存であろうとする決意表明である。

「学者」：福沢は後編までふくめた『学問のすゝめ』の中で、学者を専門家として扱っている。だが、学ぶ者一般を「学者」とする意識の系譜は古い。「初編」の始めの部分で引き合いに出されている、低年齢者を主対象に想定する啓蒙書『実語教』は、「……猶不忘農行 必莫廢学文 故末代学者 先可按此書⁴⁾ (返点・送仮名、省略)」の文で終わっている。石田梅岩の「只心を^{つくし}尽して五倫の道を^{よく}能すれば、一字不学といふ共是を^{まこと}の学者と云。⁵⁾」(『都鄙問答』)の文はよく知られている。手許にある明治11年刊『^算和算新書』には、除法の説明に続いて「学者宜シク^{よく}熟知スベシ⁶⁾」とある。「学問」する者が「学者」という生活感覚は、こうした意識系譜の中で培われたと考えられる。

専門家は学者、「学問」する者は、みな「学者」であつた。

近代化：人々の生活意識におけるその近代化とは、この場合つまるところ、「学問」か

ら学問への生活意識内容の主役交代のことである。もちろん、筆者は近代化を必ずしもプラスに評価しているのではない。近代化のマイナス面で、教育関係の最たるものは、教育の主役が教育になったところに在る。教育の主役は学習、つまり旧時代的な意味での「学問」的なものを主体にしなければ、教育の原理を誤る。自覚動機から始まらねばならない。

明治前期文学作品記述内容の一部を講究

生活意識である「学問」観近代化過程の実態講明の手懸かりを求めた。

坪内逍遙『当世書生気質』明治18～19年刊

主役はエリートの洋学書生だから、開化の急速な進展期の生活様相は新時代的だ。学問的意識内容が新時代の先端を切るのは当然だろう。最終回、諸生の進路を風評する記述には、

……は一昨年独逸に渡りて、哲学研究の最中なりと聞えぬ。⁷⁾

とある。学問はすでに専門分野別扱い(哲学)になっている。明らかに旧時代的ではない。旧時代、専門的な学問分野も大枠では、「学問」つまり人間的自立への内的実学のためにあった。あの徂徠でさえも、「只気質を養ひ候て、其生れ得たる通りを成就いたし候が学問にて候。⁸⁾」と言うくらいの状況なのだ。つまるところ、原則、一個体という小宇宙の、価値的人間性実現に集約される全体的な生活実践の問題であった。だから、分野がやすやすとは自己目的化しなかった。言え、格物致知に奉仕するものであった訳である。

明治前期すでに、学問は、知識層の間では専門的行為であり分野別扱いにするのが、大勢だったと言ってよからう。因みに、大鳥圭介「学問弁」(明治19. 講演録)では、「古来垂細垂ノ学科ニ欠ケタルモノハ宇宙至要ノ物理学ナリ。物理学ハ現在耳目ニ触ルモノ(ノ)原因ヲ探ルノ学ニテ、……人間朝夕ノ実益ヲ進ムル学ニテ、⁹⁾……」という。一般の生活感覚上でも、旧来少数派の専門学問は多数派への過程を辿っていた。

当時の文学作品の問題。例えば『破戒』(島崎藤村・明治39. 刊)には、「学問のための学問¹⁰⁾」という表現がある。しかし純粋学問の概念は、「学問弁」にもみられる実学傾向のなかでは、まだ、というところであろうか。『破戒』の文面からは、作者が「学問のための学問」を必ずしも肯定的に扱っていないように思われる。作品論は文芸批評の問題。主人公・丑松は、猪子蓮太郎の積極的な社会活動に感銘を受けている訳だ。

もっとも蓮太郎のは哲学とか経済とかの方面からそういう簡題を取り扱わないで、むしろ心理の研究に基礎を置いた。……偶然な身のつまずきから……蓮太郎は師範校の門を出て、「学問のための学問」を捨てたのである。¹¹⁾ (『破戒』)

『書生気質』の本筋に戻れば、次のような描写がある。

……元の座にたち戻りて、学問上の議論より、転じて時の政党の得失を論じ、¹²⁾ ……

また、書生仲間の世話事について、話相手に三段法の議論を仕掛けた挙句、

先刻よりの贅議論で、いくらか話が理に沈みて、……ますます退屈に困りはてゝ、¹³⁾

というところもある。学問はすでに理論的合理性の枠組みのなかに在り、不条理のなかに合理を見いだすべき実社会の一員ではない。世話事は、実態の全体を包含する複雑系の条理によらないと片づかない。現代的問題意識で言えば、論理性・実証性に基づいた理論は体系的合理性のゆえに、実態の条理性闡明への貢献度に限界があり、実践性が問われる訳だ。

そうではあっても、学問のための学問になり、超然と純粹形態の孤高をきめ込んで現実を睥睨しているのでもない。科学的な分節化思考の全盛期には至っていない。学者の社会的役割について、主役書生が仲間との会話中でした発言がある。

政党なんぞに加はるさへ書生の為には有害無益だ。……輿論の方針を左右すべき学者の本分を誤るからず。¹⁴⁾

専門的な学問による職業的生活自立がエリート書生の進路だが、専攻・専門分野が必ずしも職務遂行に直結して捉えられていないように思われる。世論のリーダーであることが本分、と自負する学業者の社会的役割意識があったと視られる。特にエリート層が実生活全体への視野・見識を本分と意識したのには、前時代に、分野が自己目的化しにくかった「学問」意識状況があり、新時代へずれ込んだことが関連しているようだ。

真の人間になるという、自覚を培うに意義のあった伝統の文化理想に基づく、内的実学による実践的教養への義務感覚が、新旧時代に通底していない、と言いきることは出来まい。世論のリーダーであることを本分とすることによった、生活者としての自覚的自立は職業的自立の基調・前提、との意識が窺われる。自律的自己決定体としての人格的自己陶冶を基調に、社会的成功を志向する崇高な野心・大志は、立身出世主義の時代的意義ではあった。

作者は描写した書生実態の時期について、次のように述べている。

話譚は明治十四五年の事に起せり。故に書生の情態の如きも、はじめ十二三回の其間は、おほむね既往に属する者多く、¹⁵⁾ ……（「緒言にかふるに、……」）

維新・上野戦争の因縁譚に直接に関わる人物が主人公、という時期、生活感覚・意識が既往に属するのは自然であるはずだ。だから、「学問」的生活意識が書生達に機能していることは、当然に推測される。上記の学者本分説に、この推測の妥当性を垣間見る。予断は禁物だが、主人公の書生・小町田に関する風評話が、牛肉店での、牛鍋と酒麴の夕食中に書生仲間二人によってなされているところにも、その気配がある。

(発言者名省略)「ずるくなるといへば、実に人間は、当にならんもんじゃなア。彼の小町田を見イ。此頃は放蕩を、はじめたといふ事ぢやぞ。」「ほんたうにか。あの勉強家が。」「ほんたうとも。大事实ぢや。……薄々は校長の耳へも這入ちよるといふから、退校になるもしれん。」「借む可しだわ。あの位、学問ができながら、僕は毫ちつともそんな事はしらなかったヨ。¹⁶⁾」

学問・勉強が、新時代の開化的な意味合いにあることは当然。今、最高学府の学生が単位数ではなくて放蕩ゆえに退校になるかどうかは知らないが、勉強家で学問のできる人物に一目を置く敬意的な意識の現象中に、学問と「学問」の関連が読み取られない訳ではない。

次のような話も出てくる。仲間の一人の「彼奴は放蕩連インターランバータイの領袖¹⁷⁾」と評されている書生が、他の二人の書生を誘っての折りの遊蕩資金に、一人の時計が質入れされたまゝに成っている。質入れしたのは領袖当人ではないのだが、未だに請け出されていない憤懣で時計所有者の書生が他の二人のことを「いとあしざまに」学校で言い触らしているのを聞き知った領袖について、作者写実主義の叙述文。

いと口惜き事に思ひて、須河(*時計所有者)の拳動こぶしどうを怒ると雖も、源げんは身からでたさびなる故、あからさまに之を弁駁せんやうもなければ、まづ彼の時計を返せし上にて、名誉恢復を図らんものと、独私ひとりひしかに心を定めて、之を山村(*時計質入れの当事者)に相談せしかど、……幾分か割前わりまえの金をいださせ、非道土面ひどうどめんして彼の時計を受出したる事にぞありける。書生中には、往々むむ継原(*「領袖」)の如き人物あり。蓋し廉恥を知る性質なれども、其執意こころざしの堅からざるから、時に劣情を制しかねて、懶惰放逸らんだはういつにながるゝのみ。年齢漸く老おいきたりて、血氣少しく静まるにいたらば、或は有用の人ともなりなん。¹⁸⁾

*は筆者

請け出した時計を所有者に返しながら領袖。学問の徒が、「学問」の実践的意義を自己問題として主張している。

「君にウオッチを渡した上で、僕の本心さへわかりゃアいゝんさ。僕は是でも学問をした人間だ。随分放蕩もするけれど、人の物を覬取ねしとつて、それで遊ぶやうな事はしないよ。……」……素もとこの継原青造といふ書生は、頗る懶惰らんだなる人物ではあれど、さすがに数年間学問を修行しただけに、廉恥の定義ていぎ デフニション ぐらゐは十分会得したる男なる故、¹⁹⁾ ……

「学問」の修養的な意義が明らかに述べられている。最終回には、

継原青造は、多年放蕩むいの報むししるけく、必至に困窮の体となりしも、守山友芳(*書生→代言人)笑止に思ひて、且つ継原が学才あるをば、甚だ惜みける由……おのが家に招き寄せて、さながら食客のやうになして、常に其扶助たすけをなしたりしかば、継原もいたく其義に恥て、翻然おこなり行為をあらためつゝ、再び学校に通学して、専ら学問に心を凝らしぬ。²⁰⁾

と描いてある。

明治初期の実話記録である、篠田鉦造『明治百話 上』（昭和6.刊）には、上記に似た質入れ話に続いて、

……まだこの頃の書生には、一旦こういった以上は、決心が眉宇にあふれ、昔の武士の金丁（*約束をたがえぬ証拠に武士の刀の刃または鐔の打合せ。女子は鏡。）の気分が言葉の中に響いていました。……書生の教養はむしろこの漢学塾の躰けに繋がっていて、時の政府の教育方針は、欧化主義に^{すべ}って行ってしまったものです。²¹⁾（『明治百話 上』）

と述べられている。

「第一回」始めの部分に、書生実態の論評話がある。

実にすさまじき書生の流行、またおそろしき車（*人力車）の繁昌。これ併ながら腕づくにて、金も名誉も意の如くに得らるゝからの奮発出精、まことに芽出たきことなれども、若し此数万の書生輩が、皆大学者となりたらむには、広くもあらぬ日本国は、学者で鼻をつくなるべく、……郷閥をたちでる折、学もし成らずば死すともなど、いうた其口で藤八五門、うつて変つた身持放埒、卒業するもの稀なるから、此容体にて続かむには、尚百年や二百年は、途中で学者にあひたしも、額合せする心配なく、²²⁾ ……

大学者になれなかった者はどうするのか。最終回の文。

……性来弁才に長ぜし故か、……遠くある地方の学校におもむき、其教頭に任ぜられしとか。地方に学者乏しとはいひながら、かかる平凡学者を教頭にすると、嗚呼地方憫むべし、²³⁾ ……

弁才と平凡学者の関連性は意味深長だが、平凡学者とは、実社会への見識を支える現実的な条理観が希薄だということか。

こういう記述もある。

人間終極の目的は快樂なり。お愉快筋が目的なりとは、今の学者の唱ふる所。……文明といひ開化といふも、……自然と世間が奢侈を好みて、……素寒貧な書生の身分で、不料簡な外容坊三昧。……年々歳々送金する、親父の額の皺、ふゆるを厭はず、未熟な書生は斯でもなけれど、ちと学問が出来てくると、忽ち自分極の木の葉天狗。自惚の鼻は高けれども、根性は矢張本の木阿彌。……見容尊前に飾るよりも、知識大事に研く方が、ぐつと身の為に徳川時代の、敝袍主義書生の風を学び、ちと外容主義を廃してはと、いつた所が馬耳東風。²⁴⁾

今の学者による生体行動のお愉快筋原則説が、現今は幸福追求の自然権説に昇華されているのは周知の通り。作者は快樂主義を揶揄的に取り扱っているのだと思われるが、文章自体からは、いかにも近現代科学技術文明期の分節化思考盛行の始まりが感じさせる。知

識にかくもんと振りがなすところには、端的な生活感覚としての、知識主義で専門家の営みである学問観がみられる。

上引の、人間行動の自己決定要因快樂原則説によれば、内的実学から外的実学への変移は、幸福主義から快樂主義へと人々の生活行動の原理が入れ替わっていったことを意味する。それは、状況内存在としての実存への自覚を促す、天道すなわち必然な自然法観から、生体一般生来な自己決定欲求に尊厳性首位の座が変わり、いわゆる幸福追求権つまり自然権に、人間性観の拠りどころが変わっていったことでもある。天道の尊厳性は事実の不可避性に在り、この意義の主体的認知が自律的自己決定の意志を生み出す。自己決定欲求という生体本来な性質の尊厳性の客観的認知は、主観的な自己正当化の自意識活性化を促すことになる。

いずれにしても、この時期の実学としての学問はいまだ外的実学の純粹形態をとらず、自立への生活行動の基本的性質において、「学問」と通底していたと考えられる。再言になるが、純粹形態＝最善、などと言うつもりは全くない。

二葉亭四迷『浮雲』明治20～22年刊

近代リアリズム小説の嚆矢とされるこの作品の著者について、知友・坪内逍遙は、

二葉亭が種々の意味に於て明治文学の真の先駆であつた事を明かにするためには、……是れは口語体完成以後に生れた人達の夢想し得ないことであろう。……想像しても見たまへ、明治初期は何もかも一足飛びだ。旧幕府から王政維新への一足飛びだ。東洋から西洋への一足飛びだといつてもいい。²⁵⁾ (『柿の蒂』)

と述べている。

同じく写実を旨として著された『書生気質』と『浮雲』の内容に観られる、生活意識としての学問への感覚およびその周辺状況の違いは、『小説神髓』と『小説総論』との主義の違いを超えて、この研究ノートの主題である、「学問」観の急速な近代化過程様相を知るに意義がある。

『浮雲』にあって『書生気質』にないものは、主役によるたびたびの教育についての言及である。多くは、主人公である文三の恋人・お勢のもの。

(文三に。)ですがネ、教育のない者ばかりを責めるわけにもいけませんヨネー。私の^{ほうやう}朋友なんぞは、教育のあると言うほどありゃアしませんガネ、それでもマア普通の教育はうけているんですよ、それでいてあなた、西洋主義のわかるものは、二十五人のうちにたった^{ひとり}四人しかないの。その^{ひとり}四人もネ、塾にいるうちだけで、^外へ出てからはネ、口ほどにもなく両親に圧制せられて、みんなお嫁にいたりお婿を取ったりしてしまいましたの。²⁶⁾ ……

お勢によれば普通の教育があるとは、新文明が普通に分かることであるのは言うまでもないが、教育があるとは、旧時代なら、学問があるとか教えがあるという表現になるはず

だ。例えば江戸期に素材を求めている、森鷗外『高瀬舟』『縁起』（大正5.刊）には、

翁草にも、教のない民だから、悪意がないのに人殺しになったと云うような、批評の詞があつたように記憶する。²⁷⁾（『高瀬舟縁起』）

と叙述されている。

教えとは、原則、（内的真理を）学ぶ自覚と意志に応じた、理解が進むために適切な、真理の具体化した学習材のことである。儒学（朱子学）古典・『中庸』の劈頭には、よく知られた、「天の命これを性と謂い、性にしたがうこれを道と謂い、道を修むるこれを教えと謂う。」という文がある。

教育があるとは学ばせられた・教えられた受動態の結果のことであり、教えがあるとは、自覚による意志で自分が学び人格的自立に得るところがあつたということであつて、自覚・意志に基づいた主体的能動態の結果のことである。自覚・意志による学習動機は、明らかな意図があつて行う学習への心的態勢であり、自分で自分を学習へ動機づける。学ばせられるのは新文明的な内容であるから、知識主義的な心性は活性化する。上引、お勢の西洋主義の内容は、女性の社会的自立に関する事柄らしく、本人の内発・自然な欲求に合っているから能動的に受け取られている。自覚的ではない、生体自然な自己決定欲求の内発心理による能動態。

到底わかるまいとはおもいましたけれども、試みに男女交際論を説いて見たのですヨ。そうしたらね、アノなんですって、私の言葉には漢語がまざるからまるっきり何を言ったのかわかりませんで……ほんとに教育のないという者はしょうのないもんですネー。²⁸⁾

男女交際論のほかにも同権論を持ち出して、「口には同権論者だ同権論者だとおっしゃるけれども、虚言ですネ。²⁹⁾」と文三のライバル本田昇をやり込めるところがある。だから、当然のこと、芸妓・花魁が出てきて書生が、

……放蕩するもいゝぢやアないか。……浩然の気を養ふのに、何の憚があるもんか。³⁰⁾（『書生気質』）

などと公言する男性中心の社会の在り方は、お勢には認められないだろう。『書生気質』の時期との違いを読んでもいゝだろうか。

失職した文三の内言の中に教育が出てくる。

しかし落胆したからと言って心変わりをするようなそんな浮薄な婦人じゃアなし、かつ通常の婦女子と違って教育もあることだから、大丈夫そんな気づかいはない。それは決してないが、³¹⁾ ……

この場合の教育は内面性の問題だが、お勢に対する勝手な要求心理展開の文脈中のもの

だから、他者倫理になっていて、新時代の自然・内発な心理主義が示されていることに成る。文三の「免職」事件をめぐるお勢の西洋主義と母親・お政の現実主義の争論を、作者は次のように解説する。

しかしながらこれを親子げんかと思うと女丈夫の本意にそむく。どうしてどうして親子げんか……そんな不道德な者でない。これはこれ^{かたじけ}なくもありがたくも日本文明の一原素ともなるべき新主義と時代後れの旧主義と衝突をする所、よくお目を止めてごらんあられましよう。³²⁾

この叙述に込められた作者の含意・意図の問題は小説評論の領域。だが、他に代えがたい絶対存在である個人の価値を原点とする基本的人権主義と、状況内存在としての自覚に基づく自律的自己決定観の相剋の問題は、そこに在る。

(お政のことを文三に。)ただ腹ばかり立てているのだから、教育のない者はしょうがないのネー。³³⁾

お勢にすれば、こういう具合である。この場合も他者倫理にかかわるもの。学問も、他者への期待・要求倫理として顔を出す(次頁)。お勢は「父親の望みで小学校へ通い、母親の好みで清元のけいこ」、隣家の娘の影響で漢学塾にも入ったことがあって、英語の稽古もしている。³⁴⁾

ほかには、本田昇についての叙述内容に教育、がある。

(本田昇は、)何者の子でどんな教育をうけどんな^{きようがい}境界を渡って来た事か、³⁵⁾……

時代は「学校令」期に入った頃。上記引用文内の教育は、通学経験を意味しているとして差し支えなかろう。ヒトの尊厳性に基づいた主体的な学習がなされるのではなくて、教育を受ける、という意味で。学校の成立によって、学習が教育になって来つゝあった。学習(受ける教育)の中身は、開化的な科学技術文明の外的知識の傾向にある。

女丈夫だからお勢は、本田昇が上司・課長令嬢の噂をすると、対抗意識から、

学問はできますか。³⁶⁾

と突然に尋ねて、昇の不意をつくことになる。こゝで学問は、受けた教育で獲得した新知識のこと。生活自立への自覚動機に基づいてなされる学習ではないから、学習成果への意識は希薄であり、知識は自己目的化しやすい。学習意志にかゝらずして、開化啓蒙の善意な教育意図の許でさせられる学習だから、旧弊知識による生活者一般への優越感を基調とした、脱生活文化の教養主義意識を生む。

親より大切な者……親より……大切な……者……親より大切な者は私にもありますワ。……

人じゃアないの、アノ真理。³⁷⁾

という訳で、学問のための学問への純粹形態思想優位の生活感覚が、ときに科学の名の下に人々に浸透していく方向が見えてくる。

しかし過渡期だから、旧時代意識の下意識的な影響が、自己防衛本能の機能として「学問」知識による自己正当化へと現象することもある。このとき、倫理は他者問題となり、人格的自立へと機能すべき「学問」の知識の本質が疎外される。

官員失職を機にお勢の心が自分から、学問は出来ないが利口で気働きがあつて如才なく上司にも受けのいゝ、官員の本田に傾いているのではないかと疑心暗鬼の文三。ひたすら、自分に都合のいゝ自律性をお勢に期待する。

(失職した文三の内言。)……道学先生に聞かせたらふざけさせて置くのが悪いというかもしれぬが、……要するにお勢の鼻において深くとがむべき筋もない。がシカシ文三には気に食わぬ、お勢の言いようが気に食わぬ。「昇ごとき犬畜生にも劣った奴の事を、そううれしように「本田さん本田さん」トうわさをしなくてもよさそうなものだ。」トおもえばまた不平になって、またおもしろくなくなって、またお勢の心意気がのみ込めなくなった。³⁸⁾
お勢が、品格品格と口癖に依っているお勢が、……しかもいっしょになってふざけている……平生の持論はどこへやった、何のために学問をした。先 自 悔 而 後 人 悔 之、そのくらしい事は承知しているだろう、³⁹⁾……

世の建前主義な道学先生を非難しつつ、旧時代の「学問」的知識を無駄に引きずり、倫理を他者問題にして新時代の雰囲気化にした文三、という読み方はいけなからぬ。お勢への愚痴的内言で、「道德を飾り物にする偽君子」⁴⁰⁾の事が出てきたりもする。

「第三編」の劈頭で、作者は言う。

心理の上から窺れば、知愚の別なく人ことごとくおもしろ味はある。内海文三の心状を窺れば、それはわからう。⁴¹⁾

まことに、新時代、ヒトの種の心の主導権は、普遍価値への目的意識態である精神から、生体一般的で知愚の別なく人ことごとくに等しく機能する、自己決定欲求の自律運動態である心理の機能法則へと移行しはじめた。

次第に、通学は学校へ行くこととなり、学習することには、必ずしもならなく成り始めたにも拘らず、教育すること＝学習すること、教育的働きかけのシステム＝学習の成立、という生活感覚の浸透過程が進行中であった。就学・入学は本来、「学問」を始めるという意味であったが、新時代に入ると学校体制日常化の中で、その意味が、学校へ行く、という問題に成っていった。お政が、はしなくも言っている。

フム学問学問とお言いだけれども、立身出世すればこそ学問だ。居所立所にまごつくようじ

ヤア、ちつとばかり書物が読めたってねっからありがた味がない。⁴²⁾

生活自立への必然な課題意識は、普遍の学習原理であり動機である。だからそこには、西洋主義のお勢が、お政を、教育のない者はしょうがない、などとばかにするけれど、生活経験から来た「存外の道理⁴³⁾」がある。しかし、学問が「学問」のためになされないと、すなわち外的実学が内的実学の基盤を失えば、独立自尊は実現しない訳だ。

尊厳な自覚の根拠になる人間性が活性化しなければ、イドは人間的自立のエネルギーとはならない。自らを高めて世に顕れんとする崇高な野心・大志に集約される、当期、立身出世主義の普遍性は、習慣化していく学校システムによった生活感覚の展開過程に拡散していき始めた。こゝに至って学問と「学問」の通底項は、生活自立のために学ぶことと、生活のために通学することとの、質と形式の関係になって行った。

生活者としての人格的自立が人々の共通の課題であった時代、「折角磨いた狭気⁴⁴⁾」を廃らしてはと、のそり十兵衛に協力を申し出た川越の源太は、確かに、職人の意地と執念を雄渾に謳う作品の主役ではない（幸田露伴『五重塔』＜明治24.～25.＞）。しかし、修養つまり人格的価値の主体的実現が知識層に限らず一般的であったことは、作者の評価してやまない事態であったはずだ。感応寺の朗円上人を、

……早くより身延の山に蜚雪の苦学を積まれ、……万人に尊敬ひ慕はる人はまた格別の心の行き方、未学を軽んぜず下司をも侮らず、親切に温和しく先に立て静に導きたまふ後に
ついて、⁴⁵⁾ ……

と描き出している。苦学・未学を内的過程に捉えている。開化の時代に『高瀬舟』を著した森鷗外、『五重塔』の幸田露伴。そこに時代というものへの心情を読むのが、未熟者の誤りでないことを願う。

註

- 1) 12, 16頁（岩波文庫・昭和17, 第1刷・昭和53. 改版）。
- 2) 白井家光著・290頁。
- 3) 112頁（鈴木範久訳・岩波文庫・平成7. 第1刷）。
- 4) 319頁（山田俊雄他校注『庭訓往来 句双紙（新日本古典文学系52）』・岩波書店・平成8.）。
- 5) 12頁（岩波文庫・昭和10.）。
- 6) 小林義則『和算新書 2』（文学社・明治11年）15丁ウ。
- 7) 『当世書生氣質』（岩波文庫・昭和12.）282頁。
- 8) 「徂徠先生問答書 中」（島田虎次編『荻生徂徠全集 1』みすず書房・昭和48年）456頁。
- 9) 松本三之介・山室信一校注『学問と知識人（日本近代思想大系10）』（岩波書店・昭和63年）。90～91頁。
- 10) 『破戒』（岩波文庫・昭和32. 第1刷・昭和43. 改版）15頁。
- 11) 同前・14～15頁。
- 12) 『当世書生氣質』215頁。
- 13) 同前・231頁。

- 14) 同前・172頁。
- 15) 同前・159頁。
- 16) 同前・39頁。
- 17) 同前・38頁。
- 18) 同前・137～138頁。
- 19) 同前・137頁。
- 20) 同前・280頁。
- 21) 『明治百話 上』(岩波文庫・平成8.) 129, 131頁。
- 22) 『当世書生気質』26頁。
- 23) 同前・281頁。
- 24) 同前・89, 90頁。
- 25) 『逍遙選集 別冊第四』(昭和52.) 407, 408頁。
- 26) 『浮雲』(岩波文庫・昭和16. 第1刷・昭和47. 改版) 27頁。
- 27) 『山椒大夫・高瀬舟』(新潮文庫・昭和43. 第1刷・昭和60. 改版) 241頁。
- 28) 『浮雲』26頁。
- 29) 同前・134～135頁。
- 30) 『当世書生気質』169頁。
- 31) 『浮雲』38頁。
- 32) 同前・65頁。
- 33) 同前・61頁。
- 34) 同前・19, 20, 21頁。
- 35) 同前・67頁。
- 36) 同前・89頁。
- 37) 同前・28頁。
- 38) 同前・109頁。
- 39) 同前・129～130頁。
- 40) 同前・102頁。
- 41) 同前・171頁。
- 42) 同前・77頁。
- 43) 同前・205頁。
- 44) 『五重塔』(岩波文庫・昭和2. 第1刷・平成6. 改版) 52頁。
- 45) 同前・17, 23頁。

◎ 「其所行もとも悪心なく、下愚^{カズ}の者の弁へなき仕業なる事、吟味の上にて明白なりしまゝ、死罪一等を宥められし物なりとぞ。」(神沢杜口『翁草 卷之117』「雑話 流人の話」<『日本随筆大成 第三期 22』吉川弘文館・昭和53. >202頁)。